

紙芝居「多喜二奪還事件」

2009年11月1日

改訂版
伊勢崎多喜二祭
実行委員会作成
文責：長谷田直之

第1幕

1931(昭和6)年9月6日、上野発9時25分発307号前橋行きに多喜二達一行は揃って乗りこみました。前橋経由で伊勢崎に向かいました。のんびりと将棋を指しているところに、深谷駅から列車に乗り込んだ菊池敏清と菊池盛男に声をかけられます。二人は、前橋駅には官憲が待っていると説得し、皆を本庄駅に下車させました。そこにも二人の特高がいましたが、特高を振り切り、ハイヤーで茂呂村(現伊勢崎市)の菊池敏清宅に向かいました。北にひろがる、美しい赤城山が見えたでしょう。

第2幕

多喜二を迎えた伊勢崎のグループは、右派の社会民衆党に抛り、1928(昭和3)年～30(昭和5)年にかけて『上毛大衆』を出し、その文芸欄で群馬のプロレタリア文学運動を展開した主筆の小林(菊池)邦作を中心とするグループを核とし、ナップ(全日本無産者芸術連盟)の会員で『戦旗』の普及をしていた菊池敏清のグループが重なり、1931年(昭和6年)夏頃に「上毛芸術研究会」を組織しました。『戦旗』は常時50部、最高時150部～160部、『上毛大衆』は県下に700部の定期読者を持っていました。

第3幕

ナップを支える作家同盟から小林多喜二と中野重治、演劇同盟から村山知義が来県し、村山は左翼劇場のため劇団員3、4名(女優は三好久子・清洲すみ子、男優は氏名不詳)を連れてきました。菊池敏清は、回想で葉書一枚の要請でナップ作家が派遣されたと語っています。葉書一枚の要請に対応したとすると、「ナップ移動隊」の発動だった可能性があります。群馬出身の詩人伊藤信吉が機関誌「ナップ」の編集部で編集実務をしていました。編集長が中野重治、作家同盟の書記長が多喜二でした。

第4幕

午後1時頃茂呂村の菊池敏清宅に着いた一行は、2時頃からの茶話会で話をしました。多喜二は「台所と文学」という題で話しました。30人近くが話を聞き、20人近くの名前が残されています。近くの菊池盛男宅に移り、早い夕食を取った時に、末っ子で当時小3の正さんは、多喜二に頭を撫でられ、将来のことを聞かれたそうです。茗荷の卵とじの味噌汁を作ったはる子さんも話しかけられました。お二人はご壮健です。

第5幕

講師と主催グループの多くを検束されましたが、文芸講演会会場では、主催者グループが代理弁士で講演会を決行しました。当時小2だった小林(菊池)邦作の長男小林進さんはお店(蚕種業)の番頭さんに連れられ、講演会会場にいました。官憲の横暴に総立ちになった聴衆で前が見えなくなったと思い出を語ってくれました。13人が代理弁士として演壇に立ちましたが、全員中止でした。当時の上毛新聞も報道しています。

第6幕

検束を逃れた菊池盛男は共栄館で事態を訴え、不当な検束から多喜二達を奪還するため、警察署に民衆の一部と共に向かいました。緊急にのぼり旗も届けられ、床を踏み鳴らしての抗議に、木造の仮庁舎は揺れたことでしょう。村山知義は、事件の回想で、「多喜二は丸太を叩き、床を踏み鳴らし、あばれる。」とリアルに描写しています。一時署内から警官が撤退し、署の内外では革命歌が響きました。双方とも応援が駆けつけた後、新聞も報道した「大乱闘」になりました。前橋、大胡から30名余が駆けつけました。

第7幕

そんな中で民衆側と警察側の交渉が始まりました。民衆側は応援に来た石井繁丸弁護士(戦後、前橋市長となる)、警察側は泉守紀県特高課長が代表でした。午前2時頃、事件を公開しないことを条件に全員の解放を約束させました。明け方には、多喜二達一行は本庄駅に送られて、東京に無事帰還しました。多喜二達を警察署近くの斎藤力宅(伊勢崎のグループの一人)で見送ったのは堤源寿(戦後、共産党県委員長)と福田正勝でした。二人は全協オルグ泉吉治と翌年共産党群馬県委員会を再建しました。

